仏頂の禅法と芭蕉の禅法

鐙　本　光　信

談林派崩壊と末派の放縦乱雑は、芭蕉等の新風運動を起した。芭蕉が「誠の俳諧」(1)即ち風雅の誠をもつて新風を起し、蕉風樹立と進展に禅の資する所は大である。禅では洞済黄共に関係あるが、参禅の師とされるのは臨済の仏頂で、は常陸鹿島郡白鳥村出生、八才根本寺に入り得度、延宝二年冷山死後住職、冷山が生前、社下の寺院住職転退任時に後住を自から定めてならぬ、年首節句に社家出仕、何事も社家の下知を受けるとの鹿島大宮司の命に従がわなかつたので、大宮司は仏頂の相続を認めず、百石の寺領半減の裁許を得て断行、仏頂は反訴して九年後に寺領復旧を認められると同時に住職を退任した。人々の中には、それが私の為でなく寺院護持のためであり、復旧後すぐ退院したとして風格を慕つた風が見え、芭蕉の鹿島紀行も仏頂退院後間もなくである。但し内々は幕府の係、即ち寺社奉行、老中等は一決したことでもあり、幕府、係相互の面目、神社側の言い分等もあり、仏頂の同時退院内約で決定と思われる。その資料はないが反証にはならず、寺社奉行、老中等になりたい者は多く、一寸した手落ち等も間接直接に口にされて、前途や役職身分等にも影響することも多い状況証拠資料は、「妙心派で知名の方が訴訟までなさる」旨の皮肉を老中が言つたのと合わせて考える必要もあり、当時芭蕉直弟子の知名者に藩士は相当いたが、旗本、御家人では見当らぬことも、仏頂への参禅と考え合わせて、奉行、老中其他へのはばかりも考えて見る必要もある。芭蕉の参禅は延宝八年冬の深川芭蕉庵移住頃からとされているが、仏教は近くの臨川庵（寺）へ訴訟、布教や俳諧の文交等で駐杖が多かつた。芭蕉参禅の師、経済力もあつて体裁も整える、仏頂自からも重んずるの風もあつて、俳諧史上はじめ其他、仏頂を見破商量するものが見当らない。

芭蕉は「僧に似て僧にあらず」「優婆塞芭蕉」等自書して在家居士だが、古くは維摩はじめ龐居士、東坡居士等有名で、道元も眼蔵礼拝得髄巻に「宋朝に居士というは……雲衲霞袂あつまりて礼拝請益すること出家の宗匠におなじ」と述

べている。奥の細道に

「仏頂和尚山居の跡あり。竪横の五尺にたらぬ草の庵、むすぶもくやし雨なかりせば。と松の炭して岩に書きつけ侍りしと、いつぞや聞え給ふ。其の跡みんと……石上の小菴、岩窟にむすびかけたり。……木啄も庵はやぶらず夏木立」

とある。仏頂の、むすぶもくやし……の句には金剛経の「応無所住而生其心」の影響が窺われる。この無所住の住はその前の、不応住色生心。不応住声香味触法生心からわかる如く住著、執着の意義であるが、仏頂はこれを無居住所乃至無住居所の意に狭く考えて「くやし」と言つている。黄檗の伝心法要に「無棲泊処」と説明する一部分があるが、これに狭義にとらわれてはならない。黄檗は、造作的、技巧的に無用の力をつかうことなしに（省力底の事）任運自在といつている。臨済禅に公案を段階的に通過する修業法があるが、六祖慧能以来の有名な句を、仏頂は経の前後をきり離して六祖と関係の話を聞いて前述の如く解していたと思わたる。日本人には漢訳金剛経を棒音読するのは、中国人が棒音読する程は一般には解り易くはないのは済家に限つたことではないが、特に公案中心の参禅のみをほとんどにしてしまう場合に、少しはずれると思わぬ状況になつているのであろう。「結ぶもくやし」では、少くとも後の志ある修業者の為にもなろう等の老婆心等は感ぜられない。永年三世徹通義介（永平寺では江戸時代に三世に列名）、が道元下で未得法（済家嗣法済）修業時代に、道元から老婆心が足らぬと一度ならず呵せられたことが、所謂三代相論になる一遠因との説がある。仏頂の場合は、やや得意に話している様子が窺えるが、「他はこれ吾にあらず」[2]と、老婆心により好箇の功徳因縁にもなろうものを、くやしと法執的に執し、矛盾の心を深層に持ちつつ草庵に坐禅し、その矛盾は寺領回復の訴訟等にも連なつているのに憐れを催すのであり、また観念的なものをも感ずるのである。

芭蕉山居には幻住庵記があるが、芭蕉が推敲を重ね、彼の俳文中量質共に最高である。完備本三本は末文に何れも幻住の情を述べている。

「……終に無能無才にして此一筋につながる。楽天は五臓の神をやぶり、老杜は痩たり。賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖ならずやと、おもひ捨てふしぬ。　先たのむ椎の木もあり夏木立。」

幻は金剛経末尾近く「一切有為法　如夢幻泡影…」の句があり、経の思想上からも簡にして意を得ている。無所住は空住であり所謂般若の空である。般若の空の原形は空住であり仏住であるが、経の法会因由分第一（序）と善現啓請分第二に仏住の状況と仏住を察し得るものがあり、啓請分には応如是住如是降伏其心とある。また芭蕉の生活は、釈迦悟道後はガンジス流域遊行が一生のと似て、遊行の一生でもあつた。仏頂

が芭蕉に与えた如意の表に遊行如意獅子王、とある。単に遊行、居住とかを離れ、所執を離れ、経の根柢を流れる無常観にも徹している。祇園精舎で説かれた金剛経のこの流れを、平家物語の作者もよく汲んで冒頭を「祇園精舎の鐘の声諸行無常の響あり」とはじめている。笈日記に「十二日（元禄八年）は阿叟（芭蕉）の忌日つとむるとて桃隣いざなひて、深川の長渓（慶）寺にまうで侍る。是は阿叟の生前たのみ申されし寺也……世の中はさらに宗祇のやどり哉。此短冊を埋めけるゆへなり。此ほつ句はばせを庵の一生無ゐなるべしと……」とあり翌九年刊の小文庫序にも「……ふるき庵ちかき長渓寺の禅師は、亡師としごろむつびかたらはれ……さらに宗祇の……史邦」とある。曹洞宗長慶寺は芭蕉と文交、親交の一空開創の寺で、芭蕉の弟子達が長渓寺と書くのは、眼蔵の渓声山色巻の東坡居士の話がよく出たせいと思われる。芭蕉庵の一生無為なるべしと……等からも、金剛経の一切有為法……に対しての無為と、長慶寺での禅話の深さも偲ばれるし、生前依頼の点も注目され、芭蕉遺愛の文台もある。東坡の話は芭蕉はじめ文人達には適したであろう。深川には黄檗派の指月庵もあり観月によく、指月庵の額字は心越筆。曹洞宗心越派（禅浄併習）の心越禅師に芭蕉は後年には参じたと越人の手紙にある。同じ念仏禅の黄派の指月庵や、道元下乍ら同じ曹洞宗の長慶寺には心越は留錫もしたと思われる。仏頂は、当時妙心寺側が隠元や隠元下に走つた人々への反抗、反感が没後まで続き、妙心派内の処罰や禁令公布あり、開悟のきつかけは洞家僧侶によるとも言われ乍ら百石の寺をついだ仏頂は、黄家、心越派や洞家へも深く和するを控え、布教上からも対抗的らしいのも、禁令後間もなくの同派内でよく思われることも、訴訟の次第からも必要と考えてでもあろう。

芭蕉は老荘に深い上に諸禅派に参じ親しみ、仏頂等に比して本地垂跡思想にも和し、浄土教にも親しみ法華経にも及び、師に常随せぬのが金剛経通読に連なり、柔軟従順に禅者等に対しても自からは痛烈な実践の人生を歩み、「高く悟りて俗に帰[3]」し、自由な学修を続け、行じ、一寸余の釈迦出山像を念持仏として遊行した芭蕉特有の禅法を見得る。

1　白雙紙。2　道元が影響を受けた天童山老典座の語。3　赤雙紙。

（寺院住職）